

イタリアの首都、ローマの南に位置するEURエウル地区は、その名を1942年に開催が予定されていたローマ万国博覧会Esposizione Universale di Roma 42の頭文字に由来する。

ムッソリーニの希望により、ファシスト党による“ローマ進軍”の20周年を記念して開催が予定されていたローマ万博は、第二次世界大戦の勃発とそれに伴う戦費の増大により工事費が窮乏したことから建設が中断し、ファシズム政権の崩壊を受けて計画が頓挫する。戦後一時荒廃しかけたが、50年代から70年代にかけて、ほぼ完成していた建築物は補完され、廃墟に近いものは解体されるなどして再整備が進み、閑静な住宅街を一方に備えた官公庁やオフィス街を主な機能として持つ街区として現在に至っている。

ローマ万博では、大小あわせて80あまりの展示が予定され、そのうちのいくつかは常設のミュージアムとして存続するように計画されていた。それまでに開かれた万博と異なり、会場全体が「帝国の首都ローマの新しいモニュメンタルな街区」として恒久的に存続することを希求したローマ万博。それに直接／間接的に由来して、現在、エウルには以下の5つのミュージアム施設がある。ローマ文明博物館(尚、2004年より内部にプラネタリウムと天文科学館も併設)、民俗伝統博物館、ルイジ・ピゴリーニ先史民族博物館、初期中世博物館、郵便通信博物館である。いずれも、イタリアが文化政策において重視する、美術・歴史的価値を前面に出した展示施設ではなく、展示物の教育的側面を強調するミュージアム群である。

今回、エウルのミュージアム施設を実地調査し、関係者から話を聞く一方で、ローマ万博の展示計画に関する史料を調べた結果、当初予定されていた古典美術の展示リスト、万博時の各館の展示に関する実行委員の有識者の報告書や建築家による設計図、計画時より現在まで存続している2館以上に力を入れて準備していたイタリア文明館での展示計画、平面プランや展示物リストなどの興味深い史料の存在が明らかになった。これらの史料には、万博時にイタリア美術の展示に期待されていた役割、ローマ帝国時代を自らの範としようとしたファシズム期のイタリアの記憶を現在もとどめるローマ文明博物館をはじめとするエウルのミュージアム群で、本来想定されていた建物の用途、展示内容についての詳細が記されていた。

『文明の祭典』をモットーとしたローマ万博では、「イタリア文明」を礼賛することにより、ファシズム期のイタリアの文化・社会・産業とのつながりを強調する展示が行なわれた。それらは具体的にどのようなものであったのか、そして、現在はそのような展示がされているのか。ファシズム期の負の遺産とどのように折り合いをつけて展示をしているのか。

展示物、およびその展示方法と政治や制度といった社会的な側面とのかかわりを例証するきわめて貴重な事例となっている同地区のミュージアム施設の成立過程と展示の実態を検討し、展示方法やその受容に着目することで、文化的・社会的機能を担うものとして再考する。その作業にあたっては、(1)イタリア美術の影で見過ごされてきたエウルのミュージアム群に新たな側面から光をあてること(2)展示物、展示方法、さらに政治体制や制度といった社会的な側面が互いを照射するような関係を調査することで、展示という行為の持つ順応性や時代性を浮き彫りにすることを目指す。

ローマ万博でムッソリーニが世界に見せようとしていた「イタリア」、現在のエウルのミュージアム施設の発信する「イタリア」の諸相、そして、ローマ万博の白眉となるはずだったイタリア文明館の、エウル株式会社(2000年～)によるミュージアムとしての再活用計画を視野に入れて、今後エウルがどのようなメッセージを発信しようとしているのかを紹介する。